

科学史・科学哲学

NO. 8

目 次

論 文

- 光学、透視画法、芸術
— レオナルド・ダ・ヴィンチの場合
伊藤しゅう 1
- 生物学の成立
— 生命観の歴史的一幕として —
林 真理 10
- 周辺科学史の序説
王 青翔 22
- 心に関する物理主義の正当化
三谷 陽一 29
- 17世紀英国におけるデモノロジーの変容
鈴木 晃仁 41

修士論文・卒業論文一覧

編集後記

東京大学 科学史・科学哲学研究室

1989

にのみ着目
acts に属す
ある。
ると思われ

17世紀英国におけるデモノロジーの変容

鈴木 晃 仁

魔女狩り研究は、近世初頭の民衆文化研究の興隆の中で優れた研究者達によって新たな光を当てられ、かつて「歴史家の品位にふさわしからぬ問題」¹と言われたテーマもヨーロッパ各国で研究の著しい進展が見られている。このような社会史における魔女狩り研究の進展ほど目覚ましくはないにしても、魔女狩りを地域レベルで担う裁判官達を説得し、それを知的に正当化するシステムであるデモノロジーに関する思想史的研究もまた、同じ時期に確実な進歩を遂げてきたと言えるだろう。²1485年にヤーコプ・シュプレンガー、ハインリヒ・クラマーの二人のドミニコ会士によって書かれた『魔女の槌』を嚆矢に、幾冊もの書物が16世紀から17世紀にかけて出版され、〈魔女は悪魔と契約を結び、その代償に超自然的な力を与えられる〉ことを述べ立て、³その異端性ゆえに魔女は死刑にされるべきであると繰り返し主張してきた。これら一連のデモノロジーは長らく啓蒙主義の軽蔑とヒューマニズムの怒りの対象であり、近代科学によって中世的迷信の残滓であるデモノロジーが打ち破られたという発想はいまだに根強い。近代科学とデモノロジーの対立、そして前者による後者の克服という図式を科学史研究が自覚的に批判するようになったのは1970年代も後半に入ってからであろう。⁴その批判の中で特に注目されたのが、グランヴィル＝ウェブスター論争と呼ばれる王政復古期のイギリスにおいて生じた魔女を巡る論争である。

この論争の最大のポイントは、近代科学の擁護者ジョセフ・グランヴィル (Joseph Glanvill, 1636-1680) が魔女の存在を主張し、魔術的な思想家のジョン・ウェブスター (John Webster, 1610-1682) がグランヴィルに反対して魔女は実在しないと反論したことをきっかけに、ケンブリッジ・プラトニストのヘンリ・モア (Henry More, 1614-1687)、そして当時のイギリス科学の中心人物であるロバート・ボイル (Robert Boyle, 1627-1691) までがグランヴィルの側に立って彼を直接間接に擁護しているという事態である。これは「近代科学によるデモノロジーの克服」というホイッグ的図式を破産させ、近代科学とデモノロジーを対立させたがる歴史家たちを悩ませてきた。この一見すると逆説的な論争を、ラットンソン、チャールズ・ウェブスター、ジェイコブ夫妻といった研究者の17世紀イギリス科学史研究の最良の成果を巧みに消化して説明したのが T. H. ジョウブである。⁵彼の解釈によればこの復古王政下の論争は、国教会のオーソドックスな見解になりつつあった自然神学に擦り合わされた、神の働きかけを前提する機械論哲学が、内乱期に様々な形で栄えたラディカルなセクトに採用されたホッブズの唯物論と、これもラディカルなセクトに支持されたパラケルスス風の自然魔術に基づいたオカルト哲学に対して行った両面攻撃である。グランヴィルやモアは魔女の存在を主張することで靈魂の実在を証明して唯物論者に反論するとともに、パラケルスス流の自然魔術を悪魔

しておきま

のわざと見做す回路を確保し、それによって唯物論、自然魔術を奉ずる政治的過激派を叩き、宗教的には復古王政下の正統である国教会の自然宗教を、思想的にはロイヤル・ソサイエティの近代科学を擁護しようとしたのである、とジョーブは結論する。

ジョーブのこの鮮やかな説明は残念ながら、1670年代のイギリスにおけるデモノロジーの発生を説明していても、デモノロジーがその後迎った運命を射程に入れていない。魔術や無神論との対立は、後のイギリス科学と自然宗教にも見られる性格であるのに、何故デモノロジーの言説は以後ロイヤル・ソサイエティないし近代科学の周辺では見られなくなるのか。例えば「悪名高き不信仰の輩ども、即ち無神論者、理神論者、等に抗して真のキリスト教を受ける」ことを意図して設立されたポイル・レクチャーでは、ニュートン哲学を自然神学の立場で解釈したものが講じられることもあったという。⁶ ニュートン科学は無神論者を反駁するために再生産され続け、同じ目標で言い立てられたはずのデモノロジーは消滅する。この差異の原因は何処に求めるべきだろうか。デモノロジーが近代科学に打ち倒されたのでなく、寧ろイギリスの近代科学を支える思想はデモノロジーを積極的に言い立てたことを、ジョーブを頂点とする近年の研究が明らかにした。だからこそ、何がデモノロジーを終わらせたのかという問いは、却って鮮明に我々に突き付けられる。イギリスのデモノロジーの歴史を辿ることでの古めかしい問いに答えることが、この小論の目標である。

イギリスでは16世紀末から17世紀に幾つかのデモノロジーが出版されている。その中でこの小論は何らかの形で当時の科学に係わりがある人物が書いたもので、魔女の実在を主張した書物を中心的に扱ってこよう。我々が扱うテキストは、ケンブリッジ出の医師、ジョン・コッタ(John Cotta, ?1575-1650)による『魔女術の審判』(1616)及びその一章が魔女に充てられている『無知な医業者達の危険の暴露』(1612)、出版当時はスコットランド国王で後のイングランド王ジェームズ1世(在位1603-1625)による『悪魔学』(1597)、前述グランヴィルの『サドカイ派打倒論』第3版(1689)、その第3部が魔女などを扱っているヘンリ・モアの『無神論者への対策』(1662)、グラスゴウ大学の自然学教授ジョージ・シンクレア(George Sinclair, d. 1696)の『悪魔の不可視の世界の暴露』(1685)である。⁷ 以上の作品のうち、大まかに言ってジェームズ、コッタによるものと、グランヴィル、モア、シンクレアによる17世紀後半に属するものの間には、その動機、目的、形式において大きな変化を見出すことができる。この小論はジェームズとコッタによるものを「前期デモノロジー」、グランヴィル、モア、シンクレアによるものを「後期デモノロジー」と呼ぶことにし、両者が如何なる点で区別されるかを論じよう。

まず両者は出版の動機である現状の認識が異なる。ジェームズは「近年魔女、悪魔、妖術師が恐ろしくも増加しており、それゆえ以下の書物を急いで執筆した」(*Demonology*, p. 2)と述べ、コッタは悪魔、魔女と同類の幻術師が「近年この王国に唸るほどいる」(*Triall*, p. 60)と述べている。悪魔と結んだ魔女が増加し、キリスト教国家を脅かしている、というのが前期デモノロジーの認識である。一方後期デモノロジーの認識によれば増えているのは魔女ではなく、魔女の存在を信じない無神論者である。グランヴィルは「魔女の存在を哲学的に論ずる書物がまさにこの時代に必要なのである。なぜならこの時代には無神論が靈魂否定論から始まっているのだから。」と論じる。(*Saducismus*, p.

62) モアは「この時代は迷信的な恐れから離れつつあり、それが無神論とならぬように努力することは時宜に叶っている」と論じ、現在が「ある牢獄からもう一つの牢獄へ、即ち迷信から無神論へ」向かいつつある時代であることを嘆く。(Antidote, p. 9) シンクレアも「無神論が大いに伸長している今日、この試論のような宗教の外壘を築くことは時宜に叶っている」(Satan's World, p. xv) とほぼ同じ表現を用いている。

後期デモノロジーがいう「靈魂否定論」「無神論」として直接の標的にされているのは、勿論グランヴィルの場合は論争の相手であるウェブスターであるが、更にその背後にホッブス(Thomas Hobbes, 1588-1679)が考えられていることは明らかである。ホッブスは『リヴァイアサン』(1651)出版の後、無神論者のレッテルを貼られて激しい攻撃を受けたことはよく知られているが、その『リヴァイアサン』でホッブスは悪魔、魔女の発生を、空想上の虚像と実在の混同、及び宗教が恐怖を媒介に支配するために魔女などを捏造したことの二つの原因に帰している。⁴⁾ 例えばモアの立論はホッブスの二つの論点を意識して論駁する形を取っており、「聖職者の貪欲、メランコリーの者の信じ易さと空想」(Antidote, p. 6)を排して不可思議な物語を選んだ、と語るモアには明確にホッブスへの意識が窺える。シンクレアにおいては露骨に「ホッブス、或はスピノザの哲学に追随するもの」(Satan's World, p. xxii)が現代の無神論の流行に責任があると断じられている。

前期デモノロジーは魔女が増えていると考え、後期デモノロジーは主としてホッブス主義の蔓延によって魔女の、ひいては靈魂、神の存在を信じない無神論者が増えていると見做した。このように異なった現状認識のもと、両者が志向する目的もまた大きく変わってくる。

コッタは「真の神の礼拝を高める為には魔女と悪魔の根絶が特に必要な務めである」と述べ、「神の聖なる怒りと復讐を實行することは国王と役人の義務である」(Triall, p. 102)と主張している。このため魔女狩りについての法を整備することがコッタのこの書物全体の主張であった。魔女狩りを神との関係における政治性の中に定位することは、『王権神授論』(1599)を出版して神と王の関係を明確に宣言したジェームズにおいてはより鮮明になる。⁵⁾ ジェームズはスコットランド王時代の1589年にデンマークに赴き、それまでスコットランドに知られていなかった悪魔と魔女の契約を骨子とする大陸型のデモノロジーを吸収してきた。その後彼は自ら魔女裁判に臨席するようになり、その興味の一つの結実として『悪魔学』を執筆したと言われる。⁶⁾ 彼が自ら審問に乗り出した魔女による国王暗殺未遂事件を報じた『スコットランド便り』(1591)は「悪魔にとって王は地球上で最大の敵である」「王は真のキリスト教徒であるから魔女達に危害を加えられはしない」と語り、⁷⁾ 神の代理人である王が、悪魔と同盟した魔女と戦うことをモチーフとしている。さらに、悪魔と戦うのは国王だけではなく、王の手足となる行政官もその義務を負わされている。「行政官が魔女に対して怠慢であれば、神は魔女を使ってその怠慢を懲らしめることができる。」「神が正しい代理人を用いて魔女を打ち懲らしめることを始めるならば、悪魔が彼〔行政官〕の職を奪ったりその強い復讐の笏杖を奪うことはできない」(Demonology, pp. 50-51)とジェームズは述べ、現実には魔女を裁く行政官が王の命令に従うことは、神の側に立って悪魔と戦うことであると主張している。

後期デモノロジーもそれが神の側に立つことを否定しはしない。彼らの目標は真の宗教を知らしめることであり、モアはそれを通じて自分の著作が「公共のためになる」(Antidote, p. 1)と誇っ

ている。しかしシンクレアが、もし悪魔の存在が信じられなくなれば「飲めや歌えや、明日は死なねばならぬ」(*Satan's World*, pp. i-ii)という宗教に反する快楽主義の生活態度が広まってしまうと嘆き、モアはクランウィルに宛てた手紙で、「悪魔が死んだと馬鹿のように歌っている不信仰の人々は、彼らの情欲と気まぐれに耽るだろう」(*Saducismus*, p. 23)と危惧していることを参考にすると、モアの「公共のため」という言葉はこの世の道徳の乱れの防止を意味していると推察される。

前期デモノロジーと後期デモノロジーは、等しく魔女の存在を論じていながら、その議論が最終的に志向する目的において異なっている。前者はその議論を通じて神と悪魔の闘争へと参与する手段であったのに対し、後者は彼岸の闘争へ直接は参与せず、この世の道徳を標的にしている。しかもジェームズ・コッタは国王による支配、行政官による魔女裁判に結実するリアルな政治をその闘争の中へ位置付けているのに対し、後期デモノロジーの論客は現実の政治に係わらない点に問題を設定している。知と彼岸の闘争と現実の政治が一体となっていた状態から、知は宗教の闘争へと直接参与することを止め、あからさまに現実の政治に発言することには慎重になる。後期デモノロジーは、神の聖戦を魔女裁判という形でこの世で代行する学知のスタイルを捨て、この世の風俗が乱れることを防止するという曖昧な目標を掲げ始めるのである。¹¹

以上のような状況認識・目的の違いの上に、二つのデモノロジーはそれを行うための手段、即ち知を営む形態においても明確な違いを見せる。前期デモノロジーがその最終的攻撃対象とした悪魔は神の善に対置される悪であっただけでなく、神の真理に対置される虚偽でもあった。悪魔は「全ての虚偽の父」と呼ばれていたように、コッタも「悪魔は屢々その同盟者、即ち魔女や妖術師の罪を隠す」(*Triall*, p. 99)「虚偽の驚異の作り手である悪魔が、我々の理性の弱々しいまざしを越えた不可思議な出来事で、妄想を信じさせるのはなんとたやすいことか。」(*Discovery*, p. 54)と真理を隠す悪魔の役割を認めている。ジェームズも「人を騙す手品師が我々の目も耳も欺いて数多くのことを事実と違って見せるように、悪魔は我々の感覚を欺く」(*Demonology*, p. 23)と述べている。このように姿を変えて人を幻惑する「プロテウス」(*Triall*, p. 92)である悪魔の虚偽と闘って、人間は魔女についての真の知を作り上げなければならない。そのためにコッタは「推定し、状況を吟味して」(*ibid.*, p. 98)「鋭い知性と卓越した感覚と覚醒した判断力を働かし、迷信や空想的なでっちあげ、習慣から自由になって」(*ibid.*, p. 101)悪魔の隠された悪しきわざを見抜き、魔女を確定し裁くことが必要であると説く。悪魔のわざは「感覚に自明ではない」(*ibid.*, p. 92)なので、それを見抜くには状況証拠からの推定という高度な知的営みが要求される。そして人間には、このように困難な問題に関して正しい判断をする力、悪魔の欺きと闘う力が、神から与えられている。悪魔は人間を騙す力を十分備えているが、それは神に許された範囲内のことであり(*ibid.*, p. 99)、「神は人間に多くのことを知る力を与えた」(*ibid.*, p. 102)のである。前期デモノロジーは、その目的において神の側に付くことを志向し、その目的を達成する手段は神に保証されていると見做していたという意味で、二重に神と関係していたのである。或は、悪魔との戦いは魔女狩りというリアルな力のレベルと、悪魔の欺きの暴露という知的なレベルの二層で行われたと言うこともできるだろう。

前期デモノロジーの慎重な戦略に比べて後期デモノロジーの戦略は単純である。シンクレアは「形

而上学的な精妙な議論を何干となくするよりも、感覚に直接に訴える証拠のほうが、心により深く長続きする印象を与える」(*Satan's World*, p. xv)と宣言し、モアは「サドカイ派の輩ども、無神論者は血の巡りが悪いので理性的な演繹でも効かないが、感覚できる経験であればぐさりと来る」(*Saducismus*, p. 23f)と語っている。その戦略に従ってシンクレア、グランヴィル、モアは、魔女の働きを報告する「平明な物語」を収集し、それらを羅列し、その平明な物語が悪魔や魔女の存在を感覚に訴えて証明することを期待している。即ち後期デモノロジーにおいては人間の感覚を欺く悪魔は考えられていない。コッタのように、「感覚と理性にとって明白でないもの」を、「知恵ある者のみに可能である巧みな推察」によって、悪魔の欺く力に抗して明らかにすること(*Triall*, p. 8 & p. 10)は必要ない。自然(悪魔も神の摂理には逆らえないという意味で自然の一部である)が積極的に人間を騙す虚偽の言葉を語ることはなくなり、知恵のあるなしに拘らず人間のまなざしは無抵抗に悪魔と魔女の真の姿を目撃する。後期デモノロジーのこの戦略は勿論、その目的(無神論者の説得)と深い関係がある。「感覚が発見して初めて実体が存在するのだ」(*Saducismus*, p. 23)と主張して霊や悪魔、魔女の存在を否定する無神論者を反駁するために、モアは「無神論者の身振りをして」語ることを「溝に落ちたものを助けるにはその中へと身を乗り出し、野蛮人と話すものはその言葉で語らなければならない」(*Antidote*, p. 7)と弁明している。相手が感覚できるものしか信じぬ無神論者であるから感覚に訴える証拠を並べて説得するというのが、後期デモノロジーが取った戦略である。前期デモノロジーの真理は欺く悪魔の技を神に与えられた能力を用いて「推察」することで初めて達成され、後期デモノロジーの真理は目撃し伝えることが無抵抗に達成しうる。デモノロジーの真理性は悪魔の欺きをきわどく見抜くべく神が賜わった知性や推論の領域を離れ、わざわざ神の保証を持ち出すまでもない感覚の領域へと移ったのである。

感覚に訴える《事実》を記したそれぞれの物語によって、無神論者を説得しようという後期デモノロジーの真理生産の戦略は、サムエル記上28章に記されているエン・ドルの魔女を巡ってその解釈を魔女否定派と争うことで真理を生産しようとしたジェームズの戦略、(*Demonology*, pp. 3-4) 或は「現在の魔女に関する混乱は聖書の研究の不備による」(*Triall*, Epistle Dedicatory)と主張したコッタの戦略とは明確な対比を示す。モアが「聖書では無神論者を納得させることはできない。」(*Antidote*, p. 6)と語る時、デモノロジーの身振りは、書かれたものに対する注釈、聖書の言葉をめぐる精妙な論議であることを止め、《事実》を伝えそれをまなざさせることへ変質した。聖書では無神論者を説得できないが、《事実》は無神論者をすら説得する。

この真理生産のスタイルとよく似た形式を、我々はスティーヴン・シェイピンがボイルの科学的書き物を分析して得た、近代科学の「書字表現のテクノロジー」に見いだす。¹⁰ ボイルが1660年に真空ポンプの実験を報告する『空気の弾性に関する自然学・機械学的新実験』を出版したとき、彼はその実験を細部に至るまでできるだけ忠実に再現し読者にその実験の心像を持たせるような表象を可能にする言語、即ち読者に仮想の《目撃》を行わせるような言語表現のテクノロジーを用いた。書物上で読者に《事実》を目撃させ、しかも出版によって仮想目撃者の数を増やすことがボイルの、そして王政復古期の科学の真理を生産するテクノロジーであった、とシェイピンは分析する。この真理生産のスタイルにおいては真理は《事実》に懸かっているのです。記述が《事実》の報告であることを読者

に説得する様々な手段をボイルは駆使する。いや寧ろ、一連の仕掛けによって初めて科学的言説における《事実》が作られる、と言った方がよいだろう。ボイルが実験の報告とその解釈をテキスト上で明確に分けているのはその仕掛けの一つであり、〈憶見〉である解釈を実験報告から分けることで、実験の報告をピュアなものにし、その事実性を高めようとボイルは意図していたのである。

テキスト作成上のこの戦略はそのまま後期デモノロジーの書物に見いだせる。モアは『無神論者への対策』の第3巻(16の章から成る)において、第2章から第14章をデモノロジカルな事件の報告にあて、第15章で「この広い世界という劇場において我々の感覚に与えられる多種多様な働きを、これまで眺めてきた」(*Antidote*, p. 133)と総括して14章までの《事実》の報告をこれからの議論と区別し、それから無神論者の論理的論駁に入る。グランヴィルにおいてはこれは更に明白である。グランヴィルの書物は「魔女術についての論考」「霊についての眞の観念」「聖書からの霊の存在の証明」といった(コッタの言葉を使えば)〈推論〉に属する部分を、「現代の物語の集成」という《事実》を述べた部分(書物全体の3分の1を占める)と別の巻として扱っている。しかもモアにはなかった工夫である一つの章を完全に一つの物語に充てるという新たな技術が見られる。シンクレアに至っては論議の部分はローマ数字で頁が付けられている30頁のみで、グランヴィルに倣って一物語一章の原則を守って事件の報告を並べた部分の220頁はアラビア数字で頁付けがされており、さらに文章で使われている活字まで異なっている。

しかし後期デモノロジーが自らの戦略をそこに収斂させた《事実》を伝える物語も、議論の部分から分けてみたところで、それが出版されてしまえば所詮は〈書かれたもの〉に過ぎない。勿論グランヴィル達自身、この問題に敏感であった。彼らは自らのテキストの眞理性=〈事実〉性を守るために如何なる仕掛けを物語自体に施しているのだろうか。

シンクレアは「この種の書物を〈書く〉ことはできない。著者は集めなくてはならない。なぜならこういった書物はある人間の創作に依存するのではなく、基本的に他人からの情報に依存しているからである。」(*Satan's World*, p. xvi)と述べている。勿論シンクレアは情報の収集による学の発展というベーコン=ロイヤル・ソサイエティの方針を踏襲しているのであるが、それ以上にこの節が〈書く〉ことを否定していることに注目しよう。グランヴィルにおいては、彼に魔女についての情報を与えた判事ロバート・ハント達は単なるインフォーマントではない。モアが編纂したグランヴィルの物語は送られてきた手紙、或は裁判記録を忠実に書き写したものであり、「署名：ロバート・ハント」「宣誓の上で我が前で記されしことなり」といった文句すら残されている。グランヴィルは、意味がわからない言葉を「事実の正統性のため、スコットランド方言そのままにしておいた」(*Saducismus*, p. 473)ということまでし、モアは「この物語を私は聞いたことがあるが、手紙に書かれていることを引き写すにとどめた」(*ibid.*, p. 411)と禁欲を示す。結局27の物語のうちモアないしグランヴィルが一人称を使って報告を〈書いて〉いるものは1つしかなく、残りは手紙や裁判記録の忠実な引き写し、或は他の者が語ったと明記されているものである。グランヴィル、モア、シンクレアは自らを書く主体ではなく、《事実》・《物語》を通過させるべき透明な伝達者と見做していたのである。コッタらと違い、彼等が知性を働かせ個性を凝らしたデモノロジーを〈書く〉ことは、無神論者を説得するべく忠実に《事実》を収集し記録するという彼等の目的に反する。事実を脚色・歪曲して不純にする可

能性がある〈書く〉という契機を排除しつつ書く」という逆説が、後期デモノロジーの説得の仕掛けであった。

また後期デモノロジーが選んだ《物語》はジェームズ・コッタの物語とは異なる性格を際立たせている。コッタは聖書を引用し、古典古代の作家を引用し、中世の年代記者の物語を引用する。これらは少なくともグランヴィル、モアには一切見えない。モアは主としてヴィーア、ボダンの著作から彼等の報告を引用し、グランヴィルは1670年代に彼の元に寄せられた裁判記録を中心に彼の書物を構成している。シンクレアはモア、グランヴィルからの物語を要約したものを中心に、彼の元に寄せられた手紙の忠実な引き写しなどグランヴィルと同じ戦略に沿おうという身振りが見える。特にデモノロジーのような通常の自然のコースから外れる超自然の出来事の報告が《事実》を伝えていると見做されるためには、それがクリアしなければならない厳しい条件があると考えられており、古典の作品、年代記の記述はその条件を満たす報告になり得ない。ポイルは「超自然の不思議な話」の物語集の出版に極めて慎重になっている。¹⁴ グランヴィルとモアは、読者にその《事実》性を信じさせることができると思った物語を注意深く選択しているのである。

その条件の一つは物語の細部の特定である。「1607年にノーサンプトンシャーのある街から3マイルの所に住んでいるある牧師の妻が……」(*Discovery*, p. 51)というコッタの記述と、「1657年の11月15日の日曜日の午後3時頃、サマーセットのシェプトン・マレットに住むヘンリー・ジョーンズの息子で当時12才だったリチャード・ジョーンズ……」(*Saducismus*, p. 339)というグランヴィルの記述を較べてみれば、グランヴィルがそれに従おうとした規範が厳しく特定性を要求していたことが知られる。このように状況の細部を細かく特定することに成功したため、ポイルはグランヴィルの著作を「公平である」と賞賛する。¹⁵ 結局、グランヴィルやモアが透明に通過させるべき物語は近代科学の《事実》を成り立たせるのと同じ規範を備えたものでなくてはならず、その規範の重要な一つは報告の細部が裁判記録のように特定されていることであった。この規範を満たす《物語》のみが《事実》を作り無神論者を説得したのである。即ち後期デモノロジーのテキストがその目的を満たす形で成立するためには、デモノロジカルな事件（主として魔女狩り）が現実に生じ、しかもこの規範に基づいて記録されていなければならない。この記録のトランスクリプトが無ければ後期デモノロジーはその本質を失う。聖書や古典古代、中世の昔から蓄積されている魔女の物語は、それが《事実》と見做されるための規範を満たさない。後期デモノロジーのテキストは現実に魔女狩りが生じなければ真理として成立し得ないのである。

今世紀初頭の歴史家がまとめたイングランドにおける魔女狩りの歴史によれば、内乱期に第二のピークを迎えた魔女狩りは処刑数においても告訴数においても1650年代から減少し、1670年代にロンドン周辺5州では処刑は1つしかない。イングランド全体でも最後の処刑は1684年、最後の告訴は1717年である。¹⁶ この小論は魔女狩りの社会史を意図しないのでこの事態の原因は問わないが、後期デモノロジーが成立するための要石である現実の魔女狩りが絶えつつあったことは間違いない。実際、『サドカイ派打倒論』の第3版を出版した出版社はある物語を入れようと思っていたのだが、この事件の裁判の結果が思わしくなかったので出版を見送ろうとした、という出版の裏話をモアはグランヴィルに宛てた手紙で書いている。(*Saducismus*, pp. 16-17) この話からもモア達の段階で既に出

版のための素材探しに苦勞していることが窺える。そもそも告訴そのものが減少している上に、けななしの告訴も無罪に至ることが多かったのであろう。変容したデモノロジーは有利な素材の枯渇に苦しんでいたのである。

しかも後期デモノロジーの物語はいま一つの決定的に不利な条件を抱えていた。後期デモノロジーは近代科学の言説と同じ形式を取ることで無神論者を説得しようとした。そのときにグランヴィルやモアが採用した《事実》を伝える《物語》の形式は、前期デモノロジーという学知から自らを区別することには成功したが、ある言説がそもそも学知であるための重要な条件、即ち非=学知との差異を失ってしまったのである。⁷⁷

1619年に出版されたパンフレットで、著者の名前も分からず、満足にページも付けられていない粗末な書物、『マーガレット・ファウラー及びフィリップ・ファウラーの魔女術の驚くべき報告』を見よう。⁷⁸ この民衆ジャーナリズム本は、「魔女についての小難しい理屈をこねるつもりはない」と述べ、議論はそこそこにして「物語」に入る。そしてこの物語は具体的な地名、魔女の名前、被害者の名前、事件の経緯などを出来る限り正確に記そうとしている。その点でコッタと同時代の書物でありながら、事件の細部まで正確に写し取ろうとする後期デモノロジーの物語に似ている。しかもこのパンフレットの半分以上を占めるのはファウラー姉妹達が巡回裁判（裁判の日付、場所、裁判官の名前も記録されている）で審理された時の記録であって、この方法もグランヴィルと同形である。或は先に言及した『スコットランド便り』も、それがエディンバラで1591年1月に火刑にされた「ファイアン博士」とその手下である魔女達を王が審理したときの忠実な記録だと自称し、「スコットランドで写しに基づいて出版された」と謳っている。⁷⁹ このように記録されている物語の事実性を何らかの手段によって証明することを意図している点で、この『スコットランド便り』も後期デモノロジーのテキストと同じ身振りを示している。しかしこのテキストはエロティックなイメージに満ち、或は魔法使いの失敗を滑稽に描く、明らかに真理ではなく娯楽を、しかも民衆の娯楽を志向したパンフレットである。

さらに鮮明な例を挙げよう。この小論が検討した後期デモノロジーのテキストの中で以後最も版を多く重ねたのはシンクレアのものである。初版が1685年に出された後、1746年から1815年までの間にこれまで確認されただけで12回も版を重ねている。しかしこれらの重版は、僅かではあるが重要な変更によりその性格を初版とは一変させている。即ち、2版以降、ローマ数字で頁付けされた自然学的な議論の部分は削られ、物語の部分だけが出版される。そしてこの物語は「エディンバラの街で、しょうがバンの行商人が売り歩いた」のである。⁸⁰ シンクレアが《事実》による説得を意図して集めたはずの物語は、そのまま大道で行商される民衆の娯楽本へとすり替えられてしまったのである。

即ち、後期デモノロジーの《事実を記録した物語》という言説形式は、既に民衆のジャーナリズム娯楽本の中で確立したものであり、シンクレアの例が示すように、民衆文化へと容易に同化してしまうものであった。後期デモノロジーが同時代のデモノロジカルな事件を詳細に語ろうとすると、超自然の出来事をそれが実際に生じたまま（或は「見てきたかのように」）語る民衆ジャーナリズムと区別が付かなくなってしまったのである。ジェームズ、コッタらのかつてのデモノロジーは聖書、古典の作家の解釈と精密な議論を中心に成り立っており、民衆ジャーナリズムとの区別が厳然として存在し

たが、後期デモノロジーの中心である《事実を伝える物語》は、娯楽を目的とする民衆本から自らを
区別できない。後期デモノロジーはかつての学知との差異化には成功しても、まさにその成功そのも
のによって、学と非=学とのより根本的な差異化に失敗したのである。

その結果魔女や幽霊についての言説は、明確に学としての形式を持った学が存在しない領域となり、
人々はその領域には俗衆の迷信という誤謬の言説か、或はアディソンのように「人を楽しませる想像
力」の娯楽の言説しか見い出さない。¹⁾ 人々の意識の中で、デモノロジカルな話は、迷信であれ文学
であれ真理とは無縁な言説へと一様に押し込まれる。デモノロジカルな現象を扱うべき、真理を志
向する学の「不在」は、それにまつわる物語がそもそも真理を志向しない言説である、という啓蒙主
義の迷信・中世攻撃のプロパガンダを生じせしめたのである。

「何がデモノロジーを終わらせたか？」という古めかしい問いに対して、「それは近代科学である」
というさらに古めかしい答えが部分的には的を射ているとこの小論は主張したい。近代科学の〈形式〉
に同化した後期デモノロジーは、それが採用した言説形態そのものの内に、それが閉塞する契機と、
学としてのアイデンティティを失う契機を宿していた。無神論者を説得するための《事実》報告主義
は、現実の魔女狩りと告発の存在をデモノロジーの言説の存在のための絶対条件とする。現実の魔女
狩りがなくなったとき、もはや魔女を扱うデモノロジーは存在し得ない。²⁾ また17世紀後半のデモノ
ロジーの本質である事実の忠実な描写は、デモノロジーと民衆文化、学と非=学の境界を曖昧にし、
人々はデモノロジーの言説を科学的真理を志向する言説として読むことを忘れ、デモノロジーの言説
は迷信と文学という真理ならざる領域のみに押し込まれる。以上のような状況の中で、無神論（と
見做された）者の増加、魔女狩りの消滅というリアルな社会史上の領域、民衆文化という領域、そし
てエリートに担われた科学という領域の三者が交差した地点で、デモノロジーは「騙し絵のように」
消えてしまったのである。

註

- (1) H. R. Trevor-Roper, *The European Witch-Craze of the 16th & 17th Centuries* (Pelican Ed., 1969), p. 7.
- (2) このデモノロジー研究の一つの成果が Sydney Anglo ed., *The Damned Art: Essays in the Literature of Witchcraft* (London, 1977) に収められた高い水準の十編の論文である。
- (3) Sydney Anglo, "Evident Authority and Authoritative Evidence: *The Malleus Maleficarum*," in *Damned Art*, 1-31. 森島恒雄『魔女狩り』（岩波新書、1970）58-73頁。
- (4) Thomas J. Shoeneman, "The Role of Mental Illness in the European Witchhunts of the 16th and 17th Centuries: An Assessment," *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 13 (1977), 337-351, Irving Kirsh, "Demonology and the Rise of Science," *Jour. Hist. Be-*

- hav. Sc., 14 (1978), 149-157, *idem*, "Demonology and Science during the Scientific Revolution," *Jour. Hist. Behav. Sc.*, 16 (1980), 359-368. 等を成果として挙げられるだろう。Kirsh, Shoemaker においてはクーンのパラダイム論の影響が強く窺える。
- (5) Thomas Harmon Jobe, "The Devil in Restoration Science: The Glanvill - Webster Witchcraft Debate," *ISIS*, 72 (1981), 343-356. See also Garfield Tourney, "The Physician and Witchcraft in Restoration England," *Medical History*, 16 (1972), 143-155, and Brian Easlea, *Which-hunting, Magic and the New Philosophy* (Sussex, 1980), Chap. 5.
- (6) Margaret Jacob, *The Newtonians and the English Revolution: 1689-1720* (Ithaca, 1976), p. 144 & pp. 156 ff.
- (7) John Cotta, *The Triall of Witch-craft* (London, 1616; facsim. rept. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1968), *idem*, *A Short Discovery of the Unobserved Dangers of Several Sorts of Ignorant and Unconsiderate Practicers of Physicke in England* (London, 1612; facsim. rept. Amsterdam, 1972), James VI & I, King of Scotland and England, *Daemonologie* (Edinburgh, 1597; facsim. rept. Amsterdam, 1969), Josoph Glanvill, *Saducismus Triumphatus*, 3rd Ed. (London, 1689; facsim. rept. New York; Scholar's Facsimiles & Reprints, 1986), Henry More, *Antidote against Atheism*, in *A Collection of Several Philosophical Writings of Dr Henry More* (London, 1662; facsim. rept. New York: Garland, 1978), and George Sinclair, *Satan's Invisible World Discover'd* (Edinburgh, 1685; Gainesville, Florida: Scholar's Facsimiles & Reprints, 1969). Hereafter abbreviated as *Triall*, *Discovery*, *Demonology*, *Saducismus*, *Antidote*, and *Satan's World*.
- (8) 『リヴァイアサン』(岩波文庫, 1954) 第一巻54頁。See also Samuel Mintz, *The Hunting of Leviathan* (London, 1962).
- (9) ジェームズを含めたデモノロジーの位置付けは以下の Stuart Clark の論文が極めて優れている。Stuart Clark, "King James's *Daemonologie*: Witchcraft and Kingship," in *Damned Art*, 156-181, *idem*, "The Scientific Status of Demonology," in Brian Vickers ed., *Occult and Scientific Mentalities in the Renaissance* (Cambridge, 1984), 351-374, *idem*, "Inversion, Misrule and the Meaning of Witchcraft," *Past and Present*, no. 87 (1980), 98-127.
- (10) Christina Larner, *Witchcraft and Religion: The Politics of Popular Belief* (Oxford, 1984), pp. 3-22.
- (11) *News from Scotland*, in G. B. Harrison ed., *Elizabethan & Jacobian Quartos* (Edinburgh, 1966), p. 15 & p. 28.
- (12) See Thomas L. Hankins, *Science and the Enlightenment* (Cambridge, 1985), pp. 3-6.
- (13) Steven Shapin, "Pump and Circumstance: Robert Boyle's Literary Technology," *Social Study of Science*, 14 (1984), 481-529. See also Peter Dear, "Totius in Verba: Rhetoric and Authority in the Early Royal Society," *ISIS*, 76 (1985), 145-161.
- (14) Robert Boyle, "Strange Reports," in *The Works of the Honourable Robert Boyle*, ed.

Thomas Birch, 6 vols, (London, 1772), v. p. 604. See also K. Park and L. J. Daston, "Unnatural Conceptions," *Past & Present*, no. 91 (1981), 20-54.

(15) Letter of Robert Boyle to Joseph Glanville, Sept. 18, 1677, in *The Works of Robert Boyle*, vol. vi., pp. 57-59.

(16) 浜林正夫「イギリス革命と魔女狩り」『思想』1978. no. 2 33-48頁。

(17) See Ron Westrum, "Science and Social Intelligence about Anomalies: The Case of Meteorites," *SSS*, 8 (1978), 461-493.

(18) *The Wonderful Discoverie of the Witchcraft of Margaret and Phillip Fowler*, (London, 1619; facsim. rept. Amsterdam, 1973), 引用はB.からである。

(19) *News from Scotland*, Title page. See also Lerner, *op. cit.*, p. 15.

(20) "introduction" to *Satan's World* by Coleman O. Parsons.

(21) *Spectator*, no. 419. July 1, 1712. ed. by G. Gregory Smith (London, 1907), vol. 3, pp. 300-301.

(22) 1712年にハートフォードシャーで魔女の告発があった時には、賛否入り混じって8本のパンフレットが出されており、事件さえあればいつでもデモロジー（に近いもの）が書かれることを示している。Phyllis J. Guskin, "The Context of Witchcraft: The Case of Jane Wenham," *Eighteenth Century Studies*, 14 (1980-81), 48-71.

紙幅の都合で文献註は必要最小限にとどめた。